
武士と騎士

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武士と騎士

【Nコード】

N5997Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

第二次世界大戦。ビルマ上空でイギリス空軍と日本陸軍航空隊は激しい死闘を繰り広げていた。その中で互いのパイロット達は戦いを経て。ビルマ戦線での空の戦いを書いてみました。

第一章

武士と騎士

第二次世界大戦のビルマ戦線。日本軍のラングーン作戦の無惨な失敗で知られる戦線だがここでは空においても激しい戦いが繰り広げられていた。

「案外っていうかな」

「ああ、そうだな」

「強いな」

「日本軍もな」

イギリス空軍の基地においてだ。兵士達がそれぞれ話していた。

「こんなにしぶといなんてな」

「海軍の言ったことは嘘じゃないよな」

「全くな」

ロイヤルネービーは太平洋戦線がはじまってすぐに太平洋艦隊を失ってしまった。プリンスオブウェールズとレパルスを日本海軍航空隊の攻撃で沈められたのだ。

空軍の者達はそれを笑っていた。しかしであった。

その彼等もだ。日本軍の思わぬ強さに驚いていたのだ。彼等は確かに強かった。

「海軍航空隊だけじゃないか」

「陸軍航空隊も強いな」

「ああ、パイロットの腕もいい」

そのことも話される。

「この戦い、辛いか？」

「そうだな、辛いな」

「ドイツ軍相手と同じ位かもな」

バトルオブブリテンのことも思い出さずにはいらなかった。あの戦いはまさに彼等にとっては危急存亡の戦いであった。とにかく

辛い戦いだっただのだ。

「勝てるかな、この戦い」

「どうだろうな。まずいかもな」

「向こうはどんどん攻めてくるしな」

「こんなにしぶといなんてな」

「しぶとくても何でもだ」

だがここだ。茶色がかった金髪に同じ色の口髭の男が言ってきた。見れば彼はパイロットの服にその身を包んでいる。

「勝たないといけない」

「あつ、ウエスター大尉」

「来ておられたんですか」

「そうだ、今戻って来た」

こう兵士達に告げる。

「やつとな」

「どうでした？今度の出撃は」

「何人生き残れました？」

「とりあえず全員帰ってこれた」

その男クエスターはあまり面白くなさそうな顔で答えた。今彼等は格納庫にいるがそこはうだるような暑さである。ラングーンはとにかく暑かった。

「ただな」

「怪我人ですか」

「多いんですね」

「何人かやられた。被弾した機体が多い」

彼は今度は苦い顔になっていた。

「修理を頼むな」

「はい、それじゃあすぐに」

「そっちは任せて下さい」

兵士達はすぐに彼の言葉に応えた。

「大尉のハリケーンもやられたんですか」

「うちの基地のEースも」

「ああ、日本軍は強い」

彼は自分の口の中に苦いものを感じていた。

「それもかなりな」

「アジアの辺境の国って思ってたんですがね」

「アジア人の国だって」

「正面からぶつかってこの有様だ」

彼はまた言った。

「それでわかるな」

「そういうことですか」

「奇襲を受けたとかじゃなくて正面から」

「武士だ」

クエスターは言い切った。

「日本の武士は手強いぞ」

「騎士よりもですか？」

「イギリスの騎士よりも」

「我々は負けてはいない」

クエスターは負けてはいないとはした。しかしであった。

「だが。勝つてもない」

「互角ってことですか、つまりは」

「そういうことですか」

「そうだ、互角だ」

まさにそれだというのだった。

第二章

「油断できない、日本の武士達も強いぞ」

「何か辛い戦いが続きますね」

「本当に」

兵士達も彼の言葉に難しい顔になる。彼等は日本のその武士達の強さをクエスターの口から知りこの戦いが容易ならざることがわかった。

そして日本側もだ。同じだった。

多くの者が苦い顔になっていた。そのうえで話をしていた。

「イギリス軍は強いな」

「スピットファイアだけじゃないな」

「パイロットの腕がいい」

「かなりな」

こう話すのだった。

「思った以上に難しいな」

「今日も辛い戦いだったしな」

「未帰還いたか？」

「いや、それはない」

未帰還はいないというのは同じだった。

「それはな」

「じゃあいいんじゃないか？」

「その分どの機体も結構やられたぞ」

未帰還はなくともだった。

「派手にな」

「そうだよな。俺もやられたしな」

「俺もな」

パイロット達の言葉である。

「危うく撃墜されそうだったな」

「そつだな」

「飛燕でも駄目か」

陸軍の戦闘機である。アメリカ軍のP51ムスタングにも似たシルエットでありその性能は中々のものである。陸軍の誇る戦闘機の一つだ。彼等はそれに乗っているのだ。

「スピットファイアとの性能はそんなにないだろ」

「数も大体互角だしな」

ここでは戦力差はなかった。日本軍は殆どの戦場において戦力が劣っている状況で戦ってきたがそれでも幸いにしてここでは違っていたのだ。

「それでも辛いな」

「パイロットの腕がいいからな」

「それだな」

「特に一人凄いのがいるな」

ここで丸刈りでやや小柄な、それでいて引き締まった顔の男が出て来た。

「指揮官か？かなりの腕前の奴がいるな」

「あつ、米田大尉」

「おられたのですか」

パイロット達はその彼を見て緊張した顔になった。そのうえで応えたのだ。

「そついえばそつですね」

「一機かなり強いのがいますね」

「あいつが中心になって動いてますしね」

「そつだ、いるな」

その男米田はここでまた言った。低くくぐもりがちの声である。

「あいつが一番手強い」

「何かクエスターっていうらしいですね」

「階級は確か大尉です」

このことは彼等も聞いていた。

「何でもバトルオブブリテンでメッサーシュミットを二十機も撃墜したとか」

「戦闘機殺しらしいですよ」

「メッサーシュミットをか」

米田はそれを聞いてその鋭い目をさらに鋭くさせた。メッサーシュミットといえばドイツ軍の誇る戦闘機だ。ドイツ空軍の看板と言つてもいい機体である。

「それを二十機もか」

「はい、他にフォッケウルフもかなり撃墜しているそうです」

これもドイツ空軍の戦闘機である。

「それがこつちに配属になったそうです」

「それで見たいですよ」

「そういう奴だったのか」

米田はここまで話を聞いて考える顔を見せた。そのうえで「の言葉である。」

「戦闘機殺しか」

「何でも代々騎士の家柄らしくて」

「軍人の家系だとか」

「騎士か」

米田は今度はその騎士ということに反応を見せた。

「イギリスの騎士か」

「はい、そうした意味では大尉と同じですよ」

「そうだな」

腕を組んで答えた言葉であつた。それには根拠があつた。

「俺は士族だしな」

「土佐出身でしたよ」

「ああ、そうだ。郷土の出だな」

土佐藩では藩士と郷土の違いがかなりあつた。坂本竜馬は郷土出身でありこのことが彼を新しい考えに導いたと言つてもいい。

第三章

「爺様の代から陸軍だ」

「じゃあ本当に同じですよね」

「武士と騎士で」

「同じか」

彼はここで考える顔を見せた。

「戦う人間同士か」

「武士道見せてやりましょうよ」

一人が言った。

「我が国のね」

「そうですね、正々堂々と戦ってそのうえで勝ちましょう」

「絶対に」

「当然だ」

米田の手に刀が握られた。実際にその手にはなくともそれでもはつきりと握られた。それは心に握られたものであったのである。

「それはな」

「じゃあ次こそはですね」

「正面から挑んでそのうえで勝って」

「武士道を見せてやりましょう」

「その通りだ。いいか」

米田はここで言った。言葉がさらに強いものになっていた。

「ただ勝つだけではない」

「はい」

「それだけではなく」

「我々の心を見せてやるのだ」

「こう言つのである。」

「いいな、武士道をだ」

「そのうえで勝つ」

「心においても」

「日本の心を見せてそれにおいても勝たなければならぬからな」
米田の考えだ。それを隠すことはしない。

「それがこの戦いだ」

「大東亜戦争のですね」

「日本の心も見せる」

「この心を」

「見せるものは武士道だ」

米田の言葉は変わらない。

「わかったな」

「はい」

「それでは」

こう話してであった。米田も他の者達もイギリス軍に対して武士道を見せんとしていた。だがこれは彼等だけではなかつたのである。

そのウエスターである。部下達に話していた。

「いいか、我々は軍人だ」

「はい、そしてですね」

「それと共に」

「騎士だ」

厳しい顔で部下達に告げる。

「このことを忘れるな」

「無論です」

「騎士として相応しい戦いをする」

「そうですね」

「そうでなくてはならない」

米田と同じであった。彼は気付いてはいないが。

「日本には武士道があるがだ」

「我等には騎士道がある」

「だからこそですね」

「気高く戦いそして恥となることはしない」

クエスターはそうでなければならぬと考えていた。それは彼の中ではまさに絶対の考えであり覆るものでは到底なかった。そうしたものだ。た。

「卑劣、無道にはなるな」

「常に騎士として、ですね」

「そのうえで戦う」

クエスターはまた言った。

「わかったな」

「はい、それでは」

「次の戦いも」

「次だけではない」

クエスターは部下の一人の今の言葉にまた返してみせた。

「その次もだ」

「ではその次もまた」

「そうだといいのですか」

「この戦いが続く限りだ」

それまでだというのである。

「いいな、騎士として戦うのだ」

「騎士と武士」

「それぞれの信念で、ですね」

「剣で勝つことには大した意味はない」

これがクエスターの考えであった。

第四章

「しかし信念で勝つことはだ」

「大きな意味がある」

「そのことこそが」

「日本の武士道に勝つ」

言葉は毅然としていた。全く揺らぐことのないものだった。

「必ずだ」

「そしてそのうえで」

「この戦争自体にも勝つというのですね」

「その通りだ。私は勝つ」

彼は部下達に対して断言した。

「日本の武士達にだ」

「では我々もまた」

「勝ちます」

こう話してだった。彼等はこれからの戦いに赴くのだった。

そして次の空の戦いにおいて。日英両軍は激しい空中戦を繰り広げた。その中には当然のように米田がいた。彼は飛燕を駆って戦場にいた。

「いいな」

「はい」

「それではですね」

「そうだ、全機正面から向かえ」

「そうせよというのである。」

「敵もまた正面から来ているからな」

「そうですね。確かに」

「敵は正面から来ています」

見ればイギリス空軍の編隊はだ。正面から来ていた。まだ小粒程度にしか見えないその編隊が正面から向かって来ているのが見えて

いる。

「それでは我々も」

「正面から」

「卑怯な真似はするな」

米田はこつも告げた。

「いいな」

「正面から正々堂々と向かい」

「そのうえで倒せといつのですね」

「武士道を見せてやれ」

これが彼の信念だった。

「いいな」

「武士道をですな」

「我々の」

「それを見せてやれ」

彼はまた言った。

「己が戦うのに相応しい相手にな」

「はい、それでは」

「今から敵に対してですな」

「正面から」

「全機突撃だ」

具体的な命令を今出した。

「そして勝つ」

「了解」

「それでは」

こうして米田が率いる飛燕の編隊はイギリス空軍の編隊に向かった。そしてそれに対するイギリス空軍の編隊を率いるのは。やはり彼だった。

「クエスター大尉」

「それではですな」

「今から」

「そうだ、今からだ」

クエスターもまた、であった。正面から来る日本陸軍航空隊の編隊を見据えていた。そうした意味において米田と全く同じであった。「敵に正面から向かう」

「そして正々堂々と戦う」

「そうするのですね」

「そして勝つ」

彼は空でも言い切ってみせた。

「武士にだ」

「騎士が勝つか武士が勝つか」

「今ここではつきりさせるのですね」

「その通りだ。行くぞ」

後続の部下達に対しての言葉だ。

「臆するな」

「臆することはありません」

「決して」

部下達もであった。その言葉に迷いはなかった。

「我等も騎士です」

「だからこそ」

「騎士は正面から戦いそのうえで勝利を収めるもの」

「ここでも彼の信念を言ってみせる。」

第五章

「わかっているな」

「それでは今から」

「敵軍に対して」

「突撃だ」

やはり同じ命令だった。

「わかったな」

「了解です」

「それでは」

スピットファイア達の翼が煌く。そのうえでだった。

彼等は日本軍の編隊に突撃する。両軍は互いに突撃していた。

米田率いる飛燕の編隊はだ。一直線に進む。

その中でだ。米田は部下達に告げた。

「いいな！」

「はい！」

「退くな、ですね！」

「そうだ、退くな！」

命令はここでも簡潔だった。

「そして臆するな」

「怯むことなく」

「このまま敵に攻撃を仕掛ける」

「命を惜しむな」

こつこつとみせるのだった。

「わかっているな」

「無論です」

「それは」

「ならいい」

米田は飛燕のコクピットの中で満足した声を出してみせた。

「それならばだ」

「はい、それでは」

「今から」

こうしてイギリス軍に突撃した。両軍の機体と機体が交差する。まさに翼と翼が触れ合わんばかりだった。だがそれで衝突した機体はなかった。

そのかわりに交差した両軍の中でだ。数機ずつ火を噴き。そのうえで墜ちていく。撃墜された者は確かに存在していた。

「くっ、三機か！」

「二機か！」

日本軍とイギリス軍でそれぞれ齒噛みする声がした。

「脱出しろ！」

「すぐにだ！」

「は、はい！」

「今すぐに！」

撃墜された者達はすぐに脱出にかかる。幸いに全員脱出できた。その五つのパラシュートを見てだ。米田もクエスターも言った。

「撃墜された者は攻撃するな」

「攻撃した場合は私が許さん」

こうそれぞれ言うのだった。

「それはいいな」

「絶対にだ」

「武士としてですね」

「騎士として」

二人の部下達は彼等の話を聞いて述べた。

「それに恥ずべき行動はするな」

「だからこそ」

「わかっています」

「それは」

それぞれの部下達もすぐに言葉を返してみせた。

「武士だからですね」

「騎士だからこそ」

「そうだ、その通りだ」

日本語と英語の違いはある。しかし二人は全く同じ言葉を言った。

「それはするな」

「いいな」

「戦うのは戦闘機に乗る敵のみ」

「それなら」

「反転する」

今度も二人同時の言葉だ。

「いいな、そしてそれでだ」

「今度は格闘戦に入るぞ」

所謂ドッグファイトだ。日本軍の戦闘機は伝統的に格闘戦に強い。

それにスピットファイアはバトルオブブリテンでも格闘戦の強さで

定評がある戦闘機だ。

そのことを考えてだ。米田もクエスターも言ったのである。

「それで敵に決定的な打撃を与える」

「わかったな」

「了解です」

「それなら」

「全機反転！」

また米田とクエスターの言葉は一緒だった。

第六章

「そのうえで格闘戦に入る！」

「いいな！」

こうしてだった。両軍は今度は激しい格闘戦に入った。米田とクエスター、それぞれの相手はもう戦う前から決まっていることだった。

「こいつだな」

「こいつしかいない」

二人はお互いの機体を正面から見据えつつ呟いた。

「俺の相手はだ」

「私が剣を交える相手はだ」

「一人しかいない」

「それならだ」

こうしてだった。まずは正面から撃ち合う。しかしそれは当たらなかった。

そのまま旋回しつつ攻撃を繰り返し合う。しかしそれで倒される二人ではなかった。そのまま撃ち合い続ける。大空を上下左右に飛び回り勝負を繰り返す。

一時間程度戦いを続けた。しかしであった。

「しぶといな」

「これ程までとはな」

二人はお互いを見合いながら呟いた。

「撃墜するのは難しいか」

「わかっていたとはいえ」

米田の飛燕が上に来た。そのうえで急降下し攻撃を仕掛ける。

だがクエスターのスピットファイアは素早く右に動いた。それで攻撃をかわしたのだ。

「くっ！」

「かわせたか」

米田は齒嚙みしクエスターは安堵した。そうして。

クエスターは自機を今度は下にやった。明らかに誘う姿勢だった。

「さあ来い」

「畏か」

二人はそれはわかった。

「それならだ」

「どう来る？」

米田はそれに乗った。彼も急降下する。

それが迫った時だ。クエスターは賭けに出た。

「今だ！」

「むっ!?!」

突如として急上昇に移った。そこから今度は垂直に曲がってみせる。そして逆さになったまま急降下してきた米田の飛燕に向かう。

「来た!?!まさか」

「これで勝てる!」

米田は驚愕しクエスターは勝利を確信していた。

「終わりだ、日本の武士よ!」

そのまま攻撃を繰り出す。機関砲が火を噴く。

クエスターは勝利を確信した。しかしだった。

米田は咄嗟に急降下の速度を速めた。それによつてだ。

スピットファイアの攻撃をかわした。まさに一瞬の判断だった。

「何っ!?!」

「危ないところだったな」

米田はまずは安堵した。今度は彼が安堵する番だった。

「一瞬の判断だったな」

「くっ、あれをかわしたか」

クエスターは乗機を上から下に旋回させた。そしてそのうえで元の態勢に戻った。身体にかかつていた重圧がとりあえずはましになった。

「まさかと思つたが」

「さて、今度はだ」

米田は再度攻撃を繰り出すとする。しかしだった。

「隊長」

「どうした？」

「基地から命令です」

部下の一人が通信を入れてきたのだった。

「すぐに戻れとのことですよ」

「何があつたんだ、一体」

「何でも地上部隊が攻撃を受けているらしくて」

「それに迎え、か」

「一旦補給を受けて援護に向かえとのことですよ」

そうだというのだった。

「ですから」

「わかつた」

軍人にとって命令は絶対だ。それならば頷くしかなかった。

「それならだ」

「全機帰還ですね」

「止むを得ない」

返答は一言だった。

「それならだ」

「はい、それでは」

「今より」

「決着をつけたかつたがな」

名残惜しい言葉だった。クエスターのスピットファイアを見ながらの言葉だ。

第七章

「あいつとはな」

「イギリスの騎士とですか」

「その騎士と」

「そうだ」

名残惜しい言葉はそのままだった。

「だが。仕方ないな」

「戻りましょう、すぐに」

「そして補給を受けて」

「地上部隊の援護に向かうぞ」

「そうするというのがあった。」

「わかったな」

「はい、それでは」

「今より」

こうしてだった。米田率いる飛燕の編隊は一旦基地に戻った。戦場に残っているのはクエスター率いるイギリス軍だった。戦

空に残っている彼等はだ。口々に言った。

「とりあえず連中は帰ったけれどな」

「それでもな」

「強かったな」

「そうだな」

クエスターは部下達の話の聞きながら述べた。

「特にあの飛燕」

「はい、やはり武士ですね」

「あの日本軍は」

「紛れもなく武士だ」

このことも認めるのだった。

「次に会う時もだ」

「正々堂々と正面からですね」

「戦いますか」

「それが私達の戦いだ」

騎士の戦いだというのだ。

「わかったな」

「はい、それは」

「それでは」

「この戦いは勝つ」

クエスターは決意をあらたにしていた。

「何があるうともだ」

「はい、それではです」

「今は」

「戻るぞ」

帰還命令だった。

「次の戦いに備えてだ」

「わかりました」

「それでは」

こうして彼等も自分達の基地に戻った。これがビルマ上空での日本軍とイギリス軍の戦いだった。

その戦いが終わって歳月が経った。その時だった。

「昔はここでなあ」

「戦争があつたんだ」

「ああ、そうだ」

褐色の痩せた老人がだ。隣にいる自分によく似た子供に笑顔で言うのだった。

「昔はな」

「確か日本とイギリスだったよね」

「ああ、そうだ」

その二国だというのだ。

「日本とイギリスが戦ったんだ」

「じゃあ僕が今立っている」

子供はだ。ここで足元を見て老人に話した。

「ここで？銃を撃ち合ったの？」

「ああ、地面では戦わなかったな」

老人はそれは否定した。

「ここではな」

「そうなんだ」

「空で戦ったんだ」

そうしてだった。上を見上げてだ。そのうえで子供に話すのだった。

「空でな」

「空で？」

「ああ、空でだったんだ」

青い空には白い雲が僅かに漂っている。空色というよりは「コバルトブルー」の、その見事な空が何処までも広がっていた。その空を見ての話だ。

「空で戦ってたんだ」

「それじゃあ飛行機で」

「そうさ。お互い戦っていたんだ」

そうだったというのだ。

「それをずっと見ていたなあ」

「ずっと？」

「ひいお爺ちゃんが子供の頃はね」

その時はという。

第八章

「見ていたさ」

「ひいお爺ちゃんが子供の頃のことなんだ」

「そうさ。あの時の日本もイギリスも」

「どうだったの？」

「格好よかったぞ」

「そんなに？」

「ああ、格好よかった」

「こつ曾孫に話すのだった。」

「とてもな。立派でな」

「そんなに服とか顔とかよかったんだ」

「いや、それだけじゃない」

「そうした外見だけではと。違うというのだ。」

「それだけじゃなくてな」

「他にも格好よかったの？」

「心が格好よかったんだ」

「そうだったと。曾孫にまた話した。」

「どちらもな」

「心がなんだ」

「日本は武士でイギリスは騎士で」

「その二つをだ。空に見ていた。」

「お互いの心を胸に戦っていたからなあ」

「だから格好よかったんだ」

「外見で格好よくはならないさ」

「それは違うというのだった。」

「外から格好よくしてもただ塗っただけだから」

「本物じゃないんだ」

「本物は中から出るんだ」

「中から？」

「そうさ、中からな」

曾孫に話を続ける。

「中から格好よくなるものなんだ」

「そういうものなんだ」

「それが人間だから。だから」

「中からだね」

「心からさ。ひいお爺ちゃんが御前に言いたいことはそれさ」

「武士と騎士だね」

子供はその二つの言葉を思い出していた。曾祖父が言ったその二つをだ。

「その両方だね」

「細かいことは違うけれどそれでも格好よかった」

「空にその武士と騎士がいたんだ」

「そうさ。そして戦ってね」

「格好よかった」

また曾祖父の言葉を反芻した。

「そうなんだ」

「そうさ。それじゃあ」

「うん、それじゃあ」

「御前もそうなってくれよ」

曾祖父は空から目を離れた。そうしてあらためて曾孫に顔を向けた。その顔は穏やかな微笑みに満ちた実に優しく温かいものだった。

その顔でだ。自分の曾孫に話すのだった。

「本当に格好いい人にな」

「武士か騎士にだね」

「そう、心が格好よくなるんだ」

「わかったよ、僕なるよ」

曾孫は素直に曾祖父のその言葉に頷いて述べた。

「本当に格好いい人に」

「ああ。じゃあ行こう」

曾祖父はすつと後ろに向かって述べた。

「パレードがはじまるからな」

「そうだね。行こう」

「ほら、あの曲も」

それは、だった。日本人がもう忘れてしまっていた曲だった。かつてはよくかかった。忘却の中に消えようとしている曲であった。

「かかっているしね」

「あの曲は何ていうの？」

「歩兵の本領さ」

曾祖父はその曲名を今曾孫に教えた。

「日本の歌だよ」

「その日本の」

「空で戦った日本人がひいお爺ちゃん達に教えてくれた曲なんだ」
日本軍はこの国に来たのだ。そして彼等と共に戦ったのである。

「この国に来た時にね」

「そういえば軍艦マーチも」

「同じだよ、日本人が教えてくれたんだ」

「それでイギリスと戦ってたんだ」

「イギリス人も立派だった」

彼等にとつて圧政者であつて敵であつた彼等もだというのだ。

「とてもね」

「悪い奴でも？」

「そう、騎士だった」

このことは否定しなかった。イギリスも。

「そのこともしっかり覚えておいてくれよ」

「うん、僕忘れないよ」

曾孫は曾祖父の今の言葉にも頷いた。彼のその顔を見て笑顔になつている。

「絶対にね」

「約束だよ。じゃあ行こう」

「うん、パレードにね」

「行こうか」

ここまで話してだった。二人はそのパレードの方に向かうのだった。演奏されているのはその日本軍の歌だ。ミヤンマーの青い空で戦った彼等の曲だ。演奏に使われているのはイギリスの楽器だった。武士と騎士はまだこの国に残っているのだろうか。

武士と騎士

完

2010・7・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5997q/>

武士と騎士

2011年2月2日21時40分発行